

研究論文

大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連

Relationship between “Ibasyo” (one’s psychological place) and social skills in university students

浅木 海音¹⁾ 奥野 誠一²⁾
Mio Asagi Seiichi Okuno

本研究の目的は、心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連を明らかにすることであった。大学新入生262名を対象とし、心理的居場所感尺度、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度、自己肯定意識尺度を実施した。その結果、心理的居場所感の「役割感」「被受容感」とソーシャルスキルとの有意な関連が示された。これらの結果から、これまでに関係が構築された重要な他者に対する役割感や被受容感は、個人内で心理的居場所として機能し、その後の新しい人間関係を構築する際に影響を及ぼす可能性が示唆された。

【キーワード】大学生、心理的居場所感、ソーシャルスキル

問題と目的

青年期は、児童期から成人期への移行期であり、ライフサイクルの中で最も心理的混乱が生じやすい時期とされる（下山，1998）。近年、青年期の中期から後期にあたる大学生において、自己不確実感や不全感を抱え、友人や教員とのコミュニケーションを適切にとれずに、大学生活への適応に困難を抱える大学生が増加している（山田・天野，2002）。大学等を対象とした学生相談についての調査では、約8割の大学等が対人関係（友人、知人、異性関係を含む）に関する相談が増加していることが明らかにされている（日本学生支援機構，2009）。

そのような青年期のメンタルヘルスに関して居場所感を取り上げられることが多くなってきている（杉本，2010；田中・田嶋，2004など）。石本（2008）によると、家族関係や恋人関係において居

場所がないと感じていると、インターネット上の友人関係に居場所を求める傾向があることが示され、居場所が感じられないという現実社会での不適応感から、インターネットやメールでの人間関係に依存する可能性が高くなることを指摘している。

また、杉本・庄司（2006a）は、居場所を「居場所環境」という視点から、個人を取り巻く包括的概念として捉え、中学生の頃の「居場所環境」を回想させ、過去と現在の「居場所環境」と精神的健康との関連について検討している。その結果、中学生時に「居場所」があると認識し、「家族のいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持ち、かつ大学生時に「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持つことと精神的健康の高さに関連が示された。一方、「居場所環境」の内容によって精神的健康は異なることも示された。

1) 立正大学大学院心理学研究科 Graduate school of Psychology, Rissho University

2) 立正大学心理学部 Faculty of Psychology, Rissho University

則定（2008）は、居場所感の中でも、心理的居場所感に注目した。心理的居場所感とは、「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場があるという感情」であり、物理的側面だけでなく人間関係性にもとづく心理的空間も含むものである。則定・斉藤（2007）によると、青年期の重要な他者に対する心理的居場所感とは自己受容、レジリエンスを促す重要な要因である。さらに、この時期には男女ともに、親友に対する心理的居場所感が直接的に自己受容を促すため、親友に対する心理的居場所感の重要性を指摘している。石本（2010）によると、大学生において、家族に対する居場所感よりも友人や恋人に対する居場所感のほうが心理的適応に影響を与えることが示されている。一方、谷測（2015）によると、大学生の学校適応について、履修によって発生する、授業間の長い空き時間などに居場所感を感じられるほど、学校に対する適応感が高まることが明らかにされた。そして、情緒的な安定が適応感に影響を与えることを指摘している。これらのことから、大学生の学校不適応や心理的問題には、心理的居場所感が影響を与えることが考えられる。本研究では、他者との関係が居場所にとって重要な要素と考え、則定（2008）の定義にならない、心の拠り所としての「心理的居場所感」に注目することとする。

大学入学以前の学校生活では、「学級」という物理的な居場所としての空間が存在する。それに対して、大学ではクラスはあっても学級のような物理的な居場所空間は存在しないことが多いであろう。また、大学入学直後では人間関係も初期段階である。したがって、大学入学後には、新たな人間関係や居場所を形成することが大学生生活への適応に影響を及ぼすと考えられる。

大学生の不適応問題に対して、ソーシャルスキル（Social skills）が関連していることが多くの先行研究により明らかにされている（橋本，2000など）。ソーシャルスキルとは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発

現を可能にする認知過程との両方を包含する概念である（相川，1996）。相川・藤田・田中（2007）によると、ソーシャルスキル不足は、抑うつ、孤独感、対人不安を強化させ、悪化した抑うつ、孤独感、対人不安がソーシャルスキル不足をより増加させるという悪循環があることを示している。反対に、ソーシャルスキルの高い大学生は、対人関係において他者から正の評価を受けることにより、さらに積極的に対人関係を展開する（渡部，1999）。

対人関係で悩む大学生の苦手とする対人場面では、ソーシャルスキルが必要となるものの1つに、今後も関係の継続が予測できる人物との初対面場面がある（谷村・渡辺，2008；後藤・大坊，2003）。とくに、大学入学後、学部・学科・コース・クラスなど同じ所属となる者に対しては、その後の長期的な人間関係が予想される。

心理的居場所感とは、発達段階によって、主となる重要な他者が変化することが明らかにされている（則定，2008）。光元・岡本（2010）は心理的居場所感の高い青年の特徴として、幼児期から青年期にかけて、母親から友人、さらに恋人へと複数の対象に対して心理的居場所感を持つことを明らかにしている。さらに、物理的に距離が離れてもそれらの心理的居場所感とは維持され、のちの発達段階においても機能することが示された。そのため、それまでの生活経験の中で形成されてきた心理的居場所感とは、場面が変わっても個人内において維持されることが予想できる。

しかし、これまでの居場所研究では、大学生を対象としたものが多く、ある程度特定の環境で一定期間過ごした状態の時期に実施されている。また、これまでに個人内で培われた心理的居場所感が、その後の新たに出会った他者との関係構築にどのような影響を与えているのかを検討している研究はあまりみられない。大学入学という環境移行期において、この点を明らかにすることは、支援につながる示唆が得られると考えられる。

そこで、本研究では、大学生が苦手としている初対面場面での心理的居場所感の影響を検討する

ために、初対面の人と出会う機会の多い大学新入生を対象とする。そして、それまでに個人内で培われた心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者

調査は、平成29年4月から6月に大学新入生262名を対象に実施した。回収した質問紙のうち、記入に不備のあった者を分析から除外し、256名（女子191名、男子65名）を分析の対象とした。

質問紙の構成

1. 心理的居場所感 心理的居場所感尺度（則定, 2008）の計20項目を使用した。本尺度は、「本来感（4項目）」「役割感（6項目）」「被受容感（6項目）」「安心感（4項目）」の4因子から測定する尺度である。本研究では、一番仲のいい人物を一人想定してもらい、「あてはまらない（1点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「あてはまる（3点）」、「よくあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。本研究では、重要な他者となる対象を、一人に限定し想起した場合の心理的居場所感を測定するために、一番仲のいい人物を一人思い浮かべて回答するよう指示した。

2. ソーシャルスキル 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田, 2005）の計27項目を使用した。本尺度は「関係開始」「解読」「主張性」「感情統制」「関係維持」「記号化」の6因子から測定する尺度である。本研究では、初対面から関係を構築していくまでの過程において使用されるであろう対人・コミュニケーションスキルを測定するために、「関係開始（8項目）」、「解読（8項目）」、「主張性（7項目）」、「関係維持（4項目）」を使用した。「あてはまらない（1点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「あてはまる（3点）」、「よくあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。なお、「関係開始」の項目においては「知らない人」や「初対面の人」を想起し、回答する項目となっている。

3. 自己肯定意識 自己肯定意識尺度（平石, 1990）の計19項目を使用した。本尺度は「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人的積極性」「被評価意識・対人緊張」の6因子から測定する尺度である。本研究では、このうち、調査対象の大学新入生への心理的負担を考慮し、自己に対する肯定的な側面を測定する「自己受容（4項目）」、「自己実現的態度（7項目）」、「充実感（8項目）」を使用した。「あてはまらない（1点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「あてはまる（3点）」、「よくあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。

倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、個人が特定されないこと、回答内容が他者に知られることはないこと、研究以外の目的で使用されないこと、回答を拒否・中断しても構わないこと、回答内容が成績には関与しないことを口頭および文書にて説明し、同意を得られた者に実施した。本研究の実施にあたり、立正大学心理学研究科研究倫理委員会の承認を得た。

結 果

各尺度の記述統計量

各先行研究の因子構造に従って、各因子に含まれる項目の合計得点を各下位尺度の項目数で除した値を下位尺度得点とした。その際、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度において、逆転項目は得点を反転させた。その記述統計量は表1の通りである。性差については、心理的居場所感各下位尺度ではいずれも男性よりも女性のほうが有意に高く、成人用ソーシャルスキル自己評定下位尺度「主張性」では女性より男性のほうが有意に高かった。

各下位尺度の α 係数を算出したところ、心理的居場所感尺度では、「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」ともそれぞれ満足のいく値（ $\alpha=.86 \sim .88$ ）が得られ、十分な内的整合性を示した。

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度において

表1 各尺度の記述統計量と α 係数

	合計 (<i>n</i> =259)	男性 (<i>n</i> =68)	女性 (<i>n</i> =191)	<i>t</i> (<i>df</i>)	α
心理的居場所感尺度					
本来感	3.48 (0.62)	3.20 (0.71)	3.57 (0.56)	3.936 (98.163) *** 男性<女性	.88
役割感	2.90 (0.62)	2.77 (0.70)	2.95 (0.58)	2.901 (257) * 男性<女性	.86
被受容感	3.12 (0.61)	2.94 (0.68)	3.18 (0.58)	2.901 (257) ** 男性<女性	.88
安心感	3.60 (0.52)	3.32 (0.62)	3.70 (0.45)	4.650 (92.951) *** 男性<女性	.88
成人用ソーシャルスキル自己評定尺度					
関係開始	2.32 (0.64)	2.42 (0.67)	2.28 (0.63)	1.472 (257) <i>n.s.</i>	.88
解釈	2.70 (0.53)	2.74 (0.65)	2.68 (0.48)	0.633 (93.763) <i>n.s.</i>	.84
主張性	2.50 (0.53)	2.61 (0.55)	2.45 (0.52)	2.158 (257) * 女性<男性	.77
関係維持	2.95 (0.49)	2.92 (0.57)	2.96 (0.47)	0.616 (257) <i>n.s.</i>	.71
自己肯定意識尺度					.91
自己受容	2.99 (0.57)	3.06 (0.67)	2.92 (0.54)	1.056 (257) <i>n.s.</i>	.73
自己実現的態度	2.63 (0.61)	2.68 (0.71)	2.61 (0.57)	0.906 (257) <i>n.s.</i>	.81
充実感	2.67 (0.61)	2.60 (0.62)	2.70 (0.61)	1.132 (257) <i>n.s.</i>	.87

() 内は標準偏差

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

も、「関係開始」「解釈」「主張性」「安心感」ともそれぞれ満足のいく値 ($\alpha=.77\sim.88$) が得られ、十分な内的整合性を示した。

自己肯定意識尺度では、「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」とも満足のいく値 ($\alpha=.73\sim.87$) が得られ、十分な内的整合性を示した。なお、自己肯定意識尺度全体でも十分な内的整合性を示した ($\alpha=.91$)。

ソーシャルスキルと心理的居場所感との関連

次に、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度と心理的居場所感の各下位尺度間の関連を調べるた

めに、偏相関分析を行った。なお、心理的居場所感の各下位尺度において性差が認められており、これまでのさまざまな先行研究から自己肯定意識と心理的居場所感との間に関連が示されている(杉本・庄司, 2006b; 石本, 2010など)。そのため、これらの影響を統制するために、性別および自己肯定意識の各下位尺度を制御変数とした(表2)。

その結果、成人用ソーシャルスキル自己評定の全下位尺度(「関係開始」「解釈」「主張性」「関係維持」)は心理的居場所感の「役割感」および「被受容感」との間に有意な相関が認められた($r=.13\sim.25$)。

表2 心理的居場所感とソーシャルスキルの偏相関係数

	成人用ソーシャルスキル自己評定尺度			
	関係開始	解説	主張性	関係維持
制御変数：性別，自己肯定意識尺度（「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」）				
心理的居場所感尺度				
本来感	.03 (.12)	.07 (.10)	.12 (.19 **)	.03 (.13 *)
役割感	.14 * (.27 **)	.25 *** (.33 **)	.25 *** (.36 **)	.21 ** (.34 **)
被受容感	.13 * (.23 **)	.22 *** (.27 **)	.20 ** (.28 **)	.15 * (.26 **)
安心感	.00 (.06)	.09 (.09)	.06 (.10)	.03 (.10)
() 内は単相関係数			* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$	

また，成人用ソーシャルスキル自己評定のどの下位尺度も「本来感」「安心感」とは有意な相関は認められなかった。

心理的居場所感と自己肯定意識の程度によるソーシャルスキルの相違

まず，自己肯定意識尺度の全項目を含めた α 係数が高いことから，これ以降，各質問項目の合計得点を項目数で除した値を自己肯定意識尺度得点とした。そして，自己肯定意識および心理的居場所感の程度によるソーシャルスキルの相違を検討するために，自己肯定意識尺度と心理的居場所感の各下位尺度の平均値より高い者を高群，低い者を低群に群分けを行った。そして，自己肯定意識（高群・低群）と，心理的居場所感の各下位尺度「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」（高群・低群）をそれぞれ独立変数とし，成人用ソーシャルスキル尺度の下位尺度である「関係開始」「解説」「主張性」「関係維持」の4つをそれぞれ従属

変数とした 2×2 の二要因分散分析を行った。

本来感と自己肯定意識の程度によるソーシャルスキルの相違

以上の群分けに基づき，成人用ソーシャルスキル自己評定の下位尺度である「関係開始」「解説」「主張性」「関係維持」をそれぞれ従属変数とし，心理的居場所感の下位尺度「本来感」と自己肯定意識を独立変数とした二要因分散分析を行った。心理的居場所感下位尺度「本来感」高群は157名，心理的居場所感下位尺度「本来感」低群は102名，自己肯定意識尺度高群は135名，自己肯定意識尺度低群は124名であった。

その結果，成人用ソーシャルスキル自己評定のいずれの下位尺度を従属変数とした場合でも，本来感の主効果および交互作用は有意ではなかった。また，自己肯定意識の主効果は有意であった。これらの結果を表3に示した。

表3 心理的居場所感下位尺度「本来感」・自己肯定意識尺度の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度各下位尺度得点

	心理的居場所感尺度 本来感		自己肯定意識尺度		F 値		
	高群 (n=157)	低群 (n=102)	高群 (n=135)	低群 (n=124)	本来感	自己肯定意識尺度	自己肯定意識尺度・ 本来感
成人用ソーシャルスキル							
関係開始	2.39 (0.63)	2.21 (0.64)	2.53 (0.59)	2.09 (0.62)	$F(1,255)=0.69$ n.s.	$F(1,255)=28.80^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=0.179$ n.s.
解読	2.72 (0.53)	2.66 (0.52)	2.82 (0.53)	2.56 (0.49)	$F(1,255)=0.001$ n.s.	$F(1,255)=15.393^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=0.473$ n.s.
主張性	2.56 (0.56)	2.39 (0.46)	2.66 (0.55)	2.31 (0.44)	$F(1,255)=1.506$ n.s.	$F(1,255)=24.063^{***}$ 低群<高群	$F(1,225)=0.121$ n.s.
関係維持	2.99 (0.47)	2.89 (0.52)	3.1 (0.46)	2.79 (0.48)	$F(1,255)=0.029$ n.s.	$F(1,255)=25.262^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=0.294$ n.s.
値は下位尺度内得点の平均値, () 内は標準偏差						* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$	

役割感と自己肯定意識の程度によるソーシャルスキルの相違

成人用ソーシャルスキル自己評定の下位尺度である「関係開始」「解読」「主張性」「関係維持」をそれぞれ従属変数とし、心理的居場所感の下位尺度「役割感」と自己肯定意識を独立変数とした二要因分散分析をおこなった。心理的居場所感下位尺度「役割感」高群は148名、心理的居場所感下位

尺度「役割感」低群は111名、自己肯定意識尺度高群は135名、自己肯定意識尺度低群は124名であった。

その結果、成人用ソーシャルスキル自己評定のいずれの下位尺度を従属変数とした場合でも、役割感の主効果は有意な結果となり、交互作用は有意ではなかった。また、自己肯定意識の主効果は有意であった。これらの結果を表4に示した。

表4 心理的居場所感下位尺度「役割感」・自己肯定意識尺度の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度各下位尺度得点

	心理的居場所感尺度 役割感		自己肯定意識尺度		F 値		
	高群 (n=148)	低群 (n=111)	高群 (n=135)	低群 (n=124)	役割感	自己肯定意識尺度	自己肯定意識尺度・ 役割感
成人用ソーシャルスキル自己評定尺度							
関係開始	2.45 (0.64)	2.15 (0.60)	2.53 (0.59)	2.09 (0.62)	$F(1,255)=5.86^{*}$ 低群<高群	$F(1,255)=22.076^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=1.631$ n.s.
解読	2.8 (0.53)	2.56 (0.50)	2.82 (0.53)	2.56 (0.49)	$F(1,255)=8.312^{**}$ 低群<高群	$F(1,255)=7.831^{**}$ 低群<高群	$F(1,255)=2.964$ n.s.
主張性	2.64 (0.55)	2.3 (0.43)	2.66 (0.55)	2.31 (0.44)	$F(1,255)=17.531^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=16.113^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=3.837$ n.s.
関係維持	3.05 (0.45)	2.82 (0.51)	3.1 (0.46)	2.79 (0.48)	$F(1,255)=6.833^{**}$ 低群<高群	$F(1,255)=17.837^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=0.139$ n.s.
値は下位尺度内得点の平均値, () 内は標準偏差						* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$	

被受容感と自己肯定意識の程度によるソーシャルスキルの相違

以上の群分けに基づき、成人用ソーシャルスキル自己評定の下位尺度である「関係開始」「解説」「主張性」「関係維持」をそれぞれ従属変数とし、心理的居場所感の下位尺度「被受容感」と自己肯定意識を独立変数とした二要因分散分析をおこなった。心理的居場所感下位尺度「被受容感」高群は

128名、心理的居場所感下位尺度「被受容感」低群は131名、自己肯定意識尺度高群は135名、自己肯定意識尺度低群は124名であった。

その結果、成人用ソーシャルスキル自己評定のいずれの下位尺度を従属変数とした場合でも、被受容感の主効果は有意な結果となり、交互作用は有意ではなかった。また、自己肯定意識の主効果は有意であった。これらの結果を表5に示した。

表5 心理的居場所感下位尺度「被受容感」・自己肯定意識尺度の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度各下位尺度得点

	心理的居場所感尺度 被受容感		自己肯定意識尺度		F 値		
	高群 (n=128)	低群 (n=131)	高群 (n=135)	低群 (n=124)	被受容感	自己肯定意識尺度	自己肯定意識尺度・ 被受容感
成人用ソーシャルスキル自己評定尺度							
関係開始	2.48 (0.67)	2.16 (0.57)	2.53 (0.59)	2.09 (0.62)	$F(1,255)=7.613^{**}$ 低群<高群	$F(1,255)=24.180^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=1.423$ n.s.
解説	2.81 (0.53)	2.59 (0.51)	2.82 (0.53)	2.56 (0.49)	$F(1,255)=5.894^{*}$ 低群<高群	$F(1,255)=10.403^{**}$ 低群<高群	$F(1,255)=0.995$ n.s.
主張性	2.64 (0.57)	2.35 (0.44)	2.66 (0.55)	2.31 (0.44)	$F(1,255)=10.009^{**}$ 低群<高群	$F(1,255)=21.579^{***}$ 低群<高群	$F(1,225)=3.341$ n.s.
関係維持	3.06 (0.49)	2.84 (0.47)	3.1 (0.46)	2.79 (0.48)	$F(1,255)=5.942^{*}$ 低群<高群	$F(1,255)=19.652^{***}$ 低群<高群	$F(1,255)=0.648$ n.s.
値は下位尺度内得点の平均値, () 内は標準偏差					* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$		

安心感と自己肯定意識の程度によるソーシャルスキルの相違

以上の群分けに基づき、成人用ソーシャルスキル自己評定の下位尺度である「関係開始」「解説」「主張性」「関係維持」をそれぞれ従属変数とし、心理的居場所感の下位尺度「安心感」と自己肯定意識を独立変数とした二要因分散分析を行った。心理的居場所感下位尺度「安心感」高群は170名、

心理的居場所感下位尺度「安心感」低群は89名、自己肯定意識尺度高群は135名、自己肯定意識尺度低群は124名であった。

その結果、成人用ソーシャルスキル自己評定のいずれの下位尺度を従属変数とした場合でも、被受容感の主効果および交互作用は有意ではなかった。また、自己肯定意識の主効果は有意であった。これらの結果を表6に示した。

表6 心理的居場所感下位尺度「安心感」・自己肯定意識尺度の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度各下位尺度得点

	心理的居場所感尺度 安心感		自己肯定意識尺度		F 値		
	高群 (n=170)	低群 (n=89)	高群 (n=135)	低群 (n=124)	安心感	自己肯定意識尺度	自己肯定意識尺度・ 安心感
成人用ソーシャルスキル自己評定尺度							
関係開始	2.37 (0.65)	2.21 (0.61)	2.53 (0.59)	2.09 (0.62)	$F(1,255) = .737$ <i>n.s.</i>	$F(1,255) = 28.915^{***}$ 低群<高群	$F(1,255) = .227$ <i>n.s.</i>
解読	2.74 (0.51)	2.61 (0.55)	2.82 (0.53)	2.56 (0.49)	$F(1,255) = 1.022$ <i>n.s.</i>	$F(1,255) = 14.591^{***}$ 低群<高群	$F(1,255) = .898$ <i>n.s.</i>
主張性	2.54 (0.58)	2.42 (0.42)	2.66 (0.55)	2.31 (0.44)	$F(1,255) = .493$ <i>n.s.</i>	$F(1,255) = 25.160^{***}$ 低群<高群	$F(1,225) = .011$ <i>n.s.</i>
関係維持	2.99 (0.50)	2.88 (0.47)	3.1 (0.46)	2.79 (0.48)	$F(1,255) = .614$ <i>n.s.</i>	$F(1,255) = 22.262^{***}$ 低群<高群	$F(1,255) = .011$ <i>n.s.</i>
値は下位尺度内得点の平均値, () 内は標準偏差					* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$		

考 察

本研究の目的は、大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルの関連について検討することであった。偏相関分析および分散分析の結果、心理的居場所感の「役割感」「被受容感」の高さとソーシャルスキルの「関係開始」「解読」「主張性」「関係維持」の高さとの間に関連があることが示された。

本研究で使用した「役割感」とは、誰かの役に立てている感覚や、誰かに対して自分にしかできない役割があるという感覚である（則定, 2008）。本研究で役割感の高さとソーシャルスキル全般の高さに関連が見られたことは、次のように考えられる。大学入学前の環境で役割感が感じられることで、周囲から受容され、自己に対して十分によい（Rosenbarg, 1965）といった自己評価の形成につながると推測される。このような肯定的な自己評価により自尊感情が高まることで（Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995）、新たな環境でも他者に対して適応的な方法で関わりを持てるようなスキルを高めるように作用したのではないかと考えられる。谷村・渡辺（2008）によれば、大学生が初対面で相手とのコミュニケーションを円滑にしていくために、「質問」が重要である。

「自分にしかできない役割があるという感覚や自分は誰かの役に立っているという感覚は、関係の構築途中である他者に対しても会話を始めることに對して負担を感じにくくさせるのかもしれない。「質問」は本研究で測定したソーシャルスキルと全体的に関連することも予想される。そのため、役割感の高さとソーシャルスキルとの関連する要因となった可能性も考えられる。

「被受容感」は、誰かに無条件に愛されているという感覚、自分が受け入れられていて、誰かに必要とされている感覚である（則定, 2008）。これまでに培われている重要な他者との関係性の中に、自分を受け入れられるという感覚である。この感覚が、実際に重要な他者がそばに居ない環境でも維持されることが推測される。本研究で被受容感の高さとソーシャルスキル全般の高さに関連が見られたことは、重要な他者に受容されることで自己受容が促進され、自分の行動傾向の社会的な適切性の認識が促進された（鈴木・小川, 2007）ことによる可能性が考えられる。

以上のことから、「役割感」と「被受容感」は、重要な他者がある場にはいない環境でも機能する感覚であると考えられ、まだ関係が十分に構築されていない人に対する適応的なソーシャルスキルの

運用に作用することが示唆される。

また、心理的居場所感の「本来感」「安心感」は、成人用ソーシャルスキルの「関係開始」「解読」「主張性」「関係維持」と有意な関連が示されなかったことについては次のように考えられる。「本来感」とは「自分らしくいられる」といった感覚、「安心感」とは安心する、居心地がいい、くつろげるといった感覚である（則定, 2008）。本研究では、スキルを活用する場面として、「知らない人とも、すぐに会話を始められる」や「誰にでも気軽にあいさつできる」など関係の構築途中である人物との対人場面が想定されるような質問が含まれていた。まだ親密ではない人物との関係が想定されたことで、緊張や戸惑い、焦りといった感情が生じたり、相手からの否定的反応に対する懸念が生じたりする可能性が予想される。そのため、自分らしくいられる感覚や居心地の良さの感覚に繋がりにくかったのではないかと考えられる。これらの2つの感覚は、実際に心理的居場所感を感じられる関係性の中で生じるものと考えられる。今回想起された場面では本来感および安心感が形成される以前の段階であり、関連が示されなかったのではないかと推測される。

さらに、藤竹（2000）は、居場所を「社会的居場所」と「人間的居場所」の2つに分けている。社会的居場所とは、他者から必要とされ、自分の資質や能力の発揮が可能であるとともに、集団における自分のポジションを明確にできる場所である。人間的居場所とは、安らぎや安心を感じられ、自分らしさを実感できる場所である。持続的な安定感を得るためには、自信を持ってその場所が自分をまるごと受け入れてくれると思える「永続的居場所」であると認知する必要があるとしている。本研究の「役割感」と「被受容感」は「社会的居場所」, 「本来感」と「安心感」は「人間的居場所」に相当すると考えられる。本研究では、この「社会的居場所」としての心理的居場所感がソーシャルスキルを発揮しやすくしたのではないかと考えられる。「人間的居場所」としての心理的居場所感とは新たな人間関係においては得にくいものである

ことは推測できる。そのため、本研究でソーシャルスキルとの関連が示されなかったことは妥当な結果であろう。人間関係が構築される過程で「人間的居場所」の獲得が促され、持続的な安定感としての「永続的居場所」という認知に繋がっているのではないかと考えられる。

本研究の結果から、これまでの環境で重要な他者との関係性により構築された心理的居場所感によって、自己受容、肯定的な自己に対する認識が進み、新たな人間関係となる他者との関係を構築するためのソーシャルスキルを向上する可能性が考えられる。

以上のように、本研究では役割感および被受容感とソーシャルスキルとの関連が示された。しかしながら、課題もあげられる。本研究の限界としては、まず心理的居場所感とソーシャルスキルについて明確な因果関係について言及するまでに至らなかったことがあげられる。本研究では、大学入学後の一時点での横断的調査であった。今後、縦断的調査を実施し、因果関係を検討する必要がある。また、男女の割合が均等ではなかったことから、性差についての結果が不十分である点が挙げられる。今後は、男女のサンプル数が等しくなるように調査を実施することが望まれる。なお、本研究では、先行研究（池谷・葛西, 2003；渡辺・山本, 2003；原田・渡辺, 2011）と同様に、肯定的自己意識の高さがソーシャルスキルの高さに関連することも示された。居場所感と肯定的自己意識との関係性も検討する必要がある。

さらに、今回は居場所があるということを前提とし、心理的居場所感の高低を基準として調査した。他方、昨今では居場所がない子どもの危機も示されている。庄司・杉本（2006a）では、「自分ひとりの居場所」が最も多く選択された居場所であった。本研究では、他者との関わりの中での居場所感を想定した教示を行ったが、「自分ひとりの居場所」の心理的機能についての実証的な検討も必要であろう。

文 献

- 相川 充 (1996). 社会的スキルという概念. 相川充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する. 誠信書房
- 相川充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. 東京学芸大学紀要, 第1部門, 教育科学, **56**, 87-93.
- 相川充・藤田正美・田中健吾 (2007). ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連—脆弱性モデルの再検討—. 社会心理学研究, **23**, 1, 95-103.
- 藤竹 暁 (2000). 居場所を考える. 藤竹 暁 (編). 現代人の居場所 (現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3), 47-57. 至文堂.
- 後藤学・大坊郁夫 (2003). 大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか?—コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連—. 対人社会心理学研究, **3**, 57-63.
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連. 教育心理学研究, **48**, 94-102.
- 原田恵理子・渡辺弥生 (2011). 高校生を対象とする感情の認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果. カウンセリング研究, **44**, 81-91.
- 平石賢二 (1990). 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康. 教育心理学研究, **38**, 320-329.
- 池谷貴彦・葛西真記子 (2003). 児童の社会的スキルと自尊感情の向上に関する研究—ピア・サポート・プログラムの実践を通して—. カウンセリング研究, **36**, 206-220.
- 石本雄真 (2008). 居場所感に関連する大学生の生活の一側面. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **2**, 1, 1-6.
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響. 発達心理学研究, **21**, 278-286.
- Leary, M.R., Tambor, E., Terdal, S., & Downs, D. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- 光元麻世・岡本裕子 (2010). 青年期における心理的居場所に関する研究—心理社会的発達の視点から—. 広島大学心理学研究, **10**, 229-243.
- 日本学生支援機構 (2009). 平成20年度「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査」について. http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/2008.html (2017年11月25日取得)
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化. カウンセリング研究, **41**, 64-72.
- 則定百合子・斉藤誠一 (2007). 日本青年心理学会大会発表論文集, **15**, 80-81.
- Rosenbarg, M. (1965). *Society and the adolescent self image*. Princeton University Press.
- 下山晴彦 (1998). 教育心理学Ⅱ—発達と臨床援助の心理学—. 東京大学出版会
- 杉本希映・庄司一子 (2006a). 大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連—過去の「居場所環境」の認知との比較を中心に—. 共生教育学研究, **1**, 37-47.
- 杉本希映・庄司一子 (2006b). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化. 教育心理学研究, **54**, 289-299.
- 杉本希映 (2010). 中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討. 湘北紀要, **31**, 49-62.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2007). 自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討—社会的スキルとの関連から—. 筑波大学心理学研究, **34**, 91-99.
- 谷渕真也 (2015). 大学生の居場所感と学校適応感の関連. 比治山大学紀要, **22**, 65-73.
- 谷村圭介・渡辺弥生 (2008). 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係. 教育心理学研究, **56**, 364-375.
- 田中麻貴・田嶋誠一 (2004). 中学校における居場所に関する研究. 九州大学心理学研究, **5**, 219-228.
- 渡部玲二郎 (1999). 対人関係能力と対人欲求の関係. 心理学研究, **70**, 154-159.
- 渡辺弥生・山本弘一 (2003). 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学校および適応指導教室での実践—. カウンセリング研究, **36**, 195-205.
- 山田ゆかり・天野寛 (2002). 自画像による大学生の適応性の検討. 名古屋文理大学紀要, **2**, 3-12.